	項目	質問	回答
19	製品ポートフォリオ：A1・A2・C2・多層型防衛	Terra C1の展開予定について	Terra C1については、偵察・監視領域を担うアセットとして、迎撃ドローン「Terra A1」「Terra A2」と組み合わせた多層型無人防衛ソリューションの中で展開を進めていく方針です。 具体的には、長時間飛行、広域運用、光学ズーム、積載性能といった特長を活かし、重要インフラの警戒監視、国境・沿岸監視、前線での状況把握、物資輸送支援などの用途を想定しています。まずは、各国の防衛・公共安全領域における運用要件を確認しながら、実証、運用評価、既存システムとの連携検討を進めてまいります。 展開地域としては、欧州、中東、アジア太平洋地域など、無人機対策や重要インフラ防護へのニーズが高い地域を中心に検討しています。
20	製品ポートフォリオ：A1・A2・C1・多層型防衛	Amazing Drones社およびWinnyLab社について、連結子会社化する資本戦略上の狙いは何ですか。また、単なる出資関係からグループ企業として統合することで、意思決定、技術連携、財務ガバナンスの面でどのようなメリットがありますか。	連結子会社化は、防衛事業における中核アセットをグループ内に取り込み、事業推進のスピードと一体性を高めることと連結での売上実績の成長を目的としています。Amazing Drones社は近距離・即応型の「Terra A1」、WinnyLab社は広域対応を担う「Terra A2」に関わる重要なパートナーであり、両社をグループ企業として位置づけることで、製品開発、事業開発、海外展開をより機動的に進められる体制を整えます。単なる出資関係ではなく連結子会社化することで、意思決定面では、グループ方針に沿った迅速な事業判断が可能になります。技術連携面では、現地で培われた実運用環境の知見を踏まえた製品改善や、A1・A2を組み合わせた多層型防衛ソリューションの開発を進めやすくなります。財務ガバナンス面では、事業計画、投資判断、収益管理をグループとして統制しやすくなり、防衛事業の成長基盤を強化できると考えています。
21	製品ポートフォリオ：A1・A2・C1・多層型防衛	ウクライナ・リヴィウを拠点とするBesomar社とのJV設立を通じて、偵察・監視用UAV「Terra C1」を発表したタイミングの意図と商業的意義は何ですか。	Besomar社とのJV設立および「Terra C1」の発表は、当社の防衛事業を迎撃ドローン単体から、偵察・監視と迎撃を組み合わせた多層型無人防衛ソリューションへ拡張するための取り組みです。防衛では、脅威を「見つける・把握する・対処する」機能が一体で求められます。MarketsandMarketsの分析では、ISR（警戒・監視）向けドローン市場は2030年に1,8兆円規模とされ、防衛ドローン市場の中でも大きな需要が見込まれます。Terra C1を加えることで、A1・A2との組み合わせによる統合提案が可能となり、単品販売型の競合との差別化につながると考えています。
22	製品ポートフォリオ：A1・A2・C1・多層型防衛	Terra C1、Terra A2、Terra A1を組み合わせた多層型無人防衛ソリューションは、単品売りの防衛アセットと比べてどのような営業上の差別化になりますか。	Terra C1、Terra A2、Terra A1を組み合わせることで、当社は単品の防衛アセット販売ではなく、脅威を「見つける・把握する・対処する」までを一体で提供する多層型無人防衛ソリューションを提案できます。Terra C1は偵察・監視、Terra A2は広域対応、Terra A1は近距離・即応対応を担い、各レイヤーにおいて実運用環境で得られた知見・実績を活かせる点が大きな特徴です。海外の防衛機関や防衛プライムは、実効性が確認されたソリューションを重視するため、コンバットプルーブンな複数アセットを組み合わせて提案できることは、当社の強い競争優位になると考えています。単なる機体メーカーではなく、実戦環境に基づく統合防衛ソリューションを提供できる企業として、海外市場での差別化を図ってまいります。
23	製品ポートフォリオ：A1・A2・C1・多層型防衛	今回のIRで、ウクライナの実運用環境における迎撃成功後の、「Terra A2」の展開の見込みは	Terra A2については、ウクライナの実運用環境において迎撃成功を確認しており、固定翼型迎撃ドローンとしての有効性を示す重要な実績だと考えています。 また、現地での運用に必要な型式認定を取得しており、複数の部隊での運用評価や導入に向けた検討が進んでいると認識しています。防衛領域では、単に製品スペックを示すだけでなく、実際の運用環境で機能した実績や、現地の運用要件に適合していることが重要です。Terra A2は、広域対応を担う固定翼型迎撃ドローンとして、近距離・即応対応を担うTerra A1とは異なる役割を持ち、より広い空域での脅威対処に活用できる可能性があります。 迎撃成功、型式認定、現地での評価進展を踏まえ、ウクライナ国内での運用拡大に加え、欧州・中東を含む海外市場での提案力強化につながるものと考えています。
24	製品ポートフォリオ：A1・A2・C1・多層型防衛	昨今の防衛環境では、GPS妨害や通信ジャミングなどの電子戦（EW）が激化しているとのことですが、テラドローンはこうした過酷な環境下でも運用可能なのでしょうか？	昨今の防衛環境では、GNSS（GPS等の衛星測位信号）妨害や通信ジャミングなどの電子戦（EW）環境下でも運用できる無人アセットの重要性が高まっています。当社が展開する偵察・監視用UAV「Terra C1」は、こうしたGPS-denied環境を想定し、機体制御、テレメトリデータの取得、映像伝送の継続性を高める通信・ナビゲーション機能を備えています。 具体的には、ベースとなるBesomar社の機体において、Sine-Linkや無線ビーコン（Radio beacons）などを活用し、GNSSや通信が妨害される環境下でも運用継続性を高める設計がなされています。 防衛・公共安全領域では、カタログ上の性能だけでなく、実際の過酷な運用環境で機能したかどうかが重要です。ウクライナの実運用環境で得られた知見を踏まえ、電子戦環境下での運用を前提に開発・改善されている点は、コンバットプルーブンが重視される防衛市場において、当社の重要な差別化要素になると考えています。
25	製品ポートフォリオ：A1・A2・C1・多層型防衛	偵察・監視を担うドローン「Terra C1」の想定される用途を教えてください。	Terra C1はフロントラインで使用されており、現代の防衛・公共安全領域で求められる偵察・監視、状況把握、前線支援に対応する実用性の高い機体だと考えています。 主な特徴は5点です。第一に、電子戦環境を前提とした設計です。GPS妨害や通信ジャミングが想定される環境下でも、機体制御、映像伝送、位置把握を継続しやすくするための通信・ナビゲーション機能を備えています。第二に、160km/h以上のハイスピードで3時間以上の飛行、10倍光学ズームカメラを備え、広域の状況把握や対象確認に活用できます。第三に、手投げまたはカタパルト発進、ワンボタン自動着陸に対応しており、滑走路などのインフラが限定された現場でも運用しやすい点が特徴です。飛行プロセスにおけるオペレーターの関与を最小限に抑える自律性」を確立しています。さらに、「ボタン一つでの自動着陸システム（Automatic landing with a single button）」を標準搭載しており、過酷なフィールド環境においてもオペレーターの負担や人的ミスによる機体損失リスクを極限まで低減しています。 第四に、最大4kgの積載に対応し、偵察に加えて医療品・重要物資の輸送など、前線ロジスティクス支援にも活用可能です。 これらの特徴により、Terra C1は単なる偵察機ではなく、Terra A1・Terra A2による迎撃と組み合わせることで、脅威を「見つける・把握する・対処する」までを一体で支援する多層型無人防衛ソリューションの中核アセットになります。防衛プライムや政府機関に対して、実運用環境を前提とした偵察・監視能力と、迎撃アセットを組み合わせて提案できる点が、当社の大きな差別化になると考えています。 これにより、昼夜を問わない国境や海域の監視、島しょ部の警戒、さらには災害時の迅速な状況把握など、長時間の偵察・監視任務において重要な役割を果たします。
26	製品ポートフォリオ：A1・A2・C1・多層型防衛	実戦環境ではGPSジャミングや通信遮断が常態化していますが、当社の偵察ドローンが搭載するSLAM（自己位置推定）技術や暗号化通信は、競合（民生品の転用や他国の防衛用ドローン）と比較して、具体的にどれほど高い任務達成率（生残性）を実証できているのでしょうか	偵察・監視任務は、相手の通信ジャミングやGPS妨害が最も激しい最前線で行われます。そのため、いかにカタログ上の機体スペックが高くとも、激しい電子戦（EW）によって飛行経路を見失ったり、取得した映像データが送れなくなってしまっては防衛装備として意味がありません。搭載している通信・位置推定技術の詳細な仕様や、具体的な任務達成率の数値については、安全保障上および防衛運用上の機微な情報に該当するため回答を差し控えますが、当社の偵察・監視ドローン「Terra C1」の最大の強みは、まさにこうしたGPS・通信が制限される過酷な電子戦環境下での運用を前提に設計・改善されている点にあります。